

そーりよくせんっ！

All Around ASSAULT-SYSTEM

著者／流遠亜沙

ASSAULT-SYSTEM 文庫

俺の名前はたろほな橘アサト。ゾイエス学園高等部に通う三年生の、ごく普通の男子だ——
なんとなく頭に浮かんだフレーズなのだが、今時こんな導入で始まる物語を書く奴がいる
なら、そいつに文才はないだろう。何時いつの時代の恋愛シミュレーションゲームだ。パロディなら
まだ判るが。

とはいえ、自分の事を語るとなると、往年のギャルゲー主人公みたいな語り口調になっ
てしまうのは、慣れていない身としては仕方がない。そもそも、なぜ語る必要があるのか
判らない。俺はただの一般人で、自分の身の回りの環境や、他人との関係性を語る必要が
あるとは思えない。ただ、何か大いなる意志が働いているのか、語らなければならない気
がする。なので、一人称小説の主人公になったつもりで、独白モノローグっぽくやっついこうと思
う。

これは可能性の集合体。

とある世界の住人達の、何でもない日常的一幕である。

開戦

『看板娘達の日常』

俺の名前は橘アサト。ゾイエス学園高等部に——これはもうやったな。あとは何を話すべきか。そもそも、誰に何を伝えればいいのか判らない。最低限の自己紹介はしたし、俺個人については、これ以上の情報は必要ないだろう。

とりあえず……同居人についてだろうか？ 事情で家族が家を空けているため、現在、この家の家主は俺という事になっている。とはいえ、一人暮らしではない。前述の通り、同居人がいる。今まさにリビングに集まっているので、一人ずつ紹介しよう。

「ふむ、ヤミヒメだ。その、何だ……ゆっくりしていくといい」

タイミング良く自己紹介の練習に入ったので、便乗していききたい。

彼女の名前は流遠ヤミヒメ。俺と同じゾイエス学園高等部に在籍する三年生で、クラスメイトでもある。古風な口調だが、別にキャラ付けとか、中二病の類ではない。昔からこうだ。今時の少女の口調ではないが、ポニーテールにした長い黒髪と抜群のスタイル、凛とした雰囲気のため、純和風というか、違和感がまるでない。琥珀を思わせる、橙色の瞳は、吊り目がちなため攻撃的にも見えるが、言い慣れない自己紹介をする様は、その容姿とのギャップもあって妙に微笑ましく見える。

「えへへ、ベアトリーチェだよ。楽しんでもらえると嬉しいな」

ヤミヒメに続いたのは妹のベアトリーチェだ。姉とは対照的に、元気浚刺^{はつらつ}というか、ウインクまでする余裕がある。ゾイエス学園中等部に在籍する一年生。普段から物怖じしない明るい性格で、あざとい一面もある。茶色のショートヘアと、猫を思わせる黄玉のような大きな瞳。年齢相応な小柄な体躯と、年齢に不相応な計算高さのギャップが、彼女が『小悪魔』と呼ばれる所以だ。

「ごきげんよう、タオエンです。……まだ何か？」

三人目の少女、名前はタオエン。戸惑い気味なヤミヒメとも、天真爛漫なベアトリーチェとも違う、無愛想で、いつそ慇懃無礼^{いんぎん}と言える自己紹介だ。ゾイエス学園高等部一年生。ヤミヒメの妹であり、ベアトリーチェの姉——つまり流遠三姉妹の次女に当たる。次女より末っ子のベアトリーチェが先に自己紹介をする理由は不明だが、そういう決まりらしい。緩く波打つ銀色のセミロングヘアと、神秘的な金色の瞳。ヤミヒメほどではないにせよスタイルは良く、バランスという意味では、むしろベストなプロポーションかもしれない。常に無表情で淡々としているが、別に機嫌が悪い訳ではなく、これが通常運転なのだ。話してみれば普通に受け答えはするし、常に冷静に周囲を見渡せ、意外に面倒見が良かったりする

る——まあ、女性限定だが。

「何ですかアサトさん。姉さんとベアトリーチェだけでなく、私にまで劣情に塗れた視線を向けたくないでください。むしろ、ずっと目を閉じていてください。視姦されているような気分になります。気持ち悪い」

これである。俺と目が合った途端、タオエンは表情筋を微動だにさせず、無表情のまま毒を吐いた。女性には優しいが、男性には厳しく、特に俺に対する風当たりは強い。ここで言い返すと百倍になって罵詈雑言が返ってくるので、俺は情けなくもタオエンから視線を外す。これは我が家の身分制度も関係していて、家事全般を請け負っている彼女の機嫌を損なうと、もはや生きていけないと言っても過言ではないのだ。家主であっても、それは例外ではない。

この三人が我が家の同居人——というか、居候だ。彼女等とは親戚で、幼馴染でもあるため、通学に便利という事で、一つ屋根の下で暮らしている。

「タオ姉、いつにも増して厳しいね」

「会議が進んでおらぬからな」

「姉さん、八つ当たりみたいに言わないでください。今日のアサトさんが、いつにも増して気持ち悪かっただけです。流れを止めてしまいましたね。最後はツバキさんです」

姉妹間での会話を挟み、タオエンがこの場にいる最後の一人に中断していた自己紹介の続きを促した。

「ごきげんいかがですか、ツバキです。心びよんびよん、していますか？」

流れが中断したにも関わらず、淀みなく涼しい顔で自己紹介をしたのは、この場で最年少の少女である。

高千穂ツバキ。

ゾイエス学園初等部に在籍する五年生だが、小学生とは思えない落ち着きがあり、物腰も丁寧な子だ。セミロングの黒髪を左側で括ったサイドポニー。蒼玉を思わせる青く澄んだ瞳。年齢相応にベアトリーチェよりも体格は小柄だが、その一部は規格外とも呼べるサイズを誇り、タオエンを凌駕しヤミヒメに匹敵する。具体的な部位は言わないが、文面から察してほしい。

「……あの、お兄さん？」

俺の視線に気付いたツバキが、気まずそうに俺を呼んだ。ツバキは俺の事を『お兄さん』と呼ぶ。『お兄ちゃん』でないのは彼女の性格的な事なのか、三姉妹に比べて付き合いが浅いが故の距離感なのかは、いまいち判然としない。ちなみに、

彼女は居候ではない。

「ん、何だ？」

俺は何もやましい事など考えてないといった風情でツバキに答える。少し身を振らせ、ほんのりと頬を赤く染めて俺を見る少女の表情には、背徳的な雰囲気がある。これで小学五年生なのだから、未恐ろしい。

「はあ……。いえ、何でもありません」

短く溜息を吐くと、ツバキは苦笑気味に言葉を呑み込んだ。俺が何を考えているかは察しているのだろうが、この話題をすると墓穴を掘ってしまうというか、自分も痛い目に遭うので、触れないのが一番だと判断したのでだろう。どう行動するのが最善かを即座に判断出来る。本当に小学生とは思えない聡い子だ。

まあ、小学生の少女に対して、邪な事を考えた自分に罪悪感を覚えなくてはないが、ツバキはツバキでコンプレックスであるため、神経過敏なところがある。

実際、俺は断じてニヤけたりはしていなかったもので、ツバキのリアクションは被害妄想でもあるのだ……。いや、冤罪とも言いきれないが。

ともあれ、俺はこれで嫌われたりはしないし、ツバキも仕方がないと理解しているため、許してもらえている節がある。言葉を呑み込んだ際の表情が、嫌悪でなく苦笑だったのは、そういう事だろう。その程度には信頼を得ていると思っている。

「アサト……」

「お兄ちゃん、欲求不満なの？」

「ダメ人間死ねばいいのに気持ち悪い」

だが、ツバキ以外の女性陣は、そうは問屋が卸さないらしい。

ヤミヒメは呆れ顔。

ベアトリーチェは悪戯っぽく。

タオエンは蔑むように。

三者三様の表情を俺に向けてくる。

俺とツバキの、この手のやり取りは初めてではない。なので三人は、俺がツバキに不埒な視線を向けていたのを察している。繰り返すが、断じていやらしい表情などしていない。無表情に関してはタオエン並だと、自他共に認めているくらいだ。

「——さあ、会議を続けましょう。自己紹介は今の感じでいいと思いますが、お兄さんはどう思われましたか？」

三姉妹からの視線で針の筵^{むしろ}状態の俺に、救いの手を差し伸べてくれたのは、他でもないツバキだった。

『すまん。助かった』

俺が目配^{アイコンタクト}せを送ると、

『どういたしまして』

と、ツバキは澄ました表情だけで応えた。

まったくもって末恐ろしい子だ。

「良かったんじゃないか？ こういうのは上手い下手より、キャラに合ってれば問題ないだろ」

先ほどの自己紹介に対して、俺なりの感想を言う。話題を変えるための口実だとしても、振られた以上は答えなければツバキの気遣いが成立しない。

「ふむ。では自己紹介については、これでよいな」

「ヤミ姉^{ねえ}はもつと落ち着いた方がいいと思うけどね」

「普段通りに堂々としていればいいんです。照れた姉さんも素敵ですが」

「はい。照れたヤミヒメさんも可愛らしいです」

「ツバキ、タオエンに合わせんでも……」

「いえ、本心ですよ」

「ヤミ姉、可愛い♪」

「……ベアトリーチェ、お前もか」

女が三人寄れば姦^{かしま}しいと言うが、四人、それも年齢が微妙にばらけていても同様らしい。こういう時、男一人だと所在なげになりがちだが、俺の場合はすでに慣れてしまっている。

今更だが、居^{いそろう}候でないツバキが家にいるのには理由がある。彼女等とはある『仕事』——賃金が発生していないので厳密には違うらしいが——をしている同僚という共通点がある。詳しい業務内容は知らないが、その『看板娘』らしい。

その『店』——便宜的にこう呼ぼう——が四月で二周年を迎えるので、そのため企画を考えるというのが、この集まりの趣旨だ。本来、そういうのは雇い主——『管理人』とかいう奴がすべきだと思うのだが、彼女等に丸投げしたそうだ。

大丈夫か、その仕事？

一応、業務内容は法には触れていないらしいが……。

「……………」

俺は改めて看板娘達を見渡す。今の今まで触れなかったが、まず真っ先に触れ

るべき事柄がある。

それは——彼女等がメイド服を着ているという事だ。

今やコスプレの定番衣装で、本・来・の・家・政・婦・と・は・一・線・を・画・す・存・在・と・な・つ・た・、あ・の・メイドさんの格好をしている。なぜかツバキのみ和服にエプロンだが、頭には共通のヘッドドレスを装着している。これが看板娘の制服らしい。

本当に何の店なのか……。

小・中・高・校・生・女・子・に・メ・イ・ド・服・を・着・せ・る・業・務・内・容・。繰り返すが、法には触れていない。いっそ、いかがわしい店だと言われた方が納得しやすいのだが、違うのだからややこしい。

「やっぱり新シリーズじゃない？ 今度はちよつと主人公の年齢を上げて、女子中学生が主役の魔法少女もので！」

「いや、凍結中の例の企画を再起動すべきだ。現行の企画は、そのための布石なのだろうか？」

「その前に、マイナーチェンジというか、仕切り直しをするべきです。看板娘の構成が変わったにも関わらず、あの企画が以前のままなのは問題です」

「私は現行の企画の新展開もアリだと思います。支持はただけていますし、いわゆる続編的な」

それぞれに意見が出されているが、部外者の俺には何の事だか判らない。小説や漫画などの出版社とか、創作に関する仕事なのだろうか？ しかし、そこに看板娘がいる理由が判らない。

「じゃあ新キャラ！ 新展開で中学生の『機獣少女』が登場するの！」

「それはまかりならん。あの管理人に、これ以上のネタがあるとは思えん。やはり『狂襲姫』をだな」

「ですから、まず地盤を固めるためにも、『Z・S』の再構築が最優先ではないかと」
「現状維持なら、『ゾイヤミ』の続投ですね。新キャラはリスクが大きいので、既存キャラを主役にしたスピンオフがオススメです」

会議は踊る、されど進まず。

結局、この場に出た案を箇条書きにして管理人に提出する事で、会議は終わりをした。

これは後になって聞いた話だが、最終的にはタオエンの案が採用されたらしい。現状で出来る企画としては最優秀——というか、他の案が実現不可能なためだったらしい。それだけでは企画として弱いので、タオエン秘蔵のお宝画像が提供さ



れ、一騒動あったらしいが、詳細は知らない。
……本当に大丈夫か、この仕事？

Mission complete

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』の一本目をお届け致します。

本作が公開されているであろう四月一日をもちまして、本サイトは二周年を迎えます。

昨年五月にツバキも『ASSAULT form』の看板娘に加わり、看板娘の日常を描く『ZS（ゾイドチック・ストラテジー）』にも参戦させたかったのですが、タイトルに『ゾイド』とある性質上、それは叶わず、他にも色々思うところがあり、このタイミングで新たなシリーズを立ち上げる事となりました。それに伴い、『ZS』は終了し、以降は『そーりよくせんっ！』に組み込まれる事となります。

大きな変更点としては、アサトとヤミヒメの学年が三年生に上がった事と、ツバキが加わった事です。現状ではそれだけですが、『総力戦』というタイトルに相応しい展開となる予定ですので、期待していただければ望外の喜びです。

それでは謝辞を。

おかげさまで二周年を迎える事が出来ました。これは社交辞令でもなんでもなく、読んでくださる方がいるから続けられる事です。何の反応もなく、自己満足だけで続けられるほど、創作は楽な作業ではありません。感想がなくても、アクセス数を見れば「読んでらえているはず」だと思います。とはいえ、感想を戴けるのが一番嬉しいですが。イラストやブログへのコメントでも構いませんので、何か感じてもらえたなら、ウェブ拍手で送ってください。

三年目も続けられる限り続けたいと思います。ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

2016 / 3 / 26 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る